

昭和十年四月十六日

梨本元帥官殿下帶山練兵場ニ於テ御親閲ヲ賜フ

御眞影奉安所奉遷

昭和十一年四月二十七日

客月ヨリ工事中ノ御眞影奉安所改築竣工ニ付熊本高等工業學校奉安殿ニ安置セル御聖影ヲ奉遷ス

昭和十一年五月

寄宿舎食堂一部改築成ル

昭和十一年九月

寄宿舎食堂一部ノ移築ニヨリテ第二生徒控所成ル

昭和十一年十一月

寄宿舎食堂全ク成ル

昭和十二年四月

在寮生集會所成ル知命堂ト稱ス

生徒集會所改築成ル終諧堂ト稱ス

昭和十二年九月

記念會館
新築

開校五十年記念會館新築竣功ス

昭和十二年十月十日

五十年記
念式舉行

開校五十年記念式典ヲ舉行ス文部大臣代理文部省専門學務局長男爵山川健來リ臨ム

結 語

高等學校は、本邦教育制度に於て、特殊な、一種微妙の教育機關である。即ち、殆ど實際生活と懸絶せるかの如き觀ある二十歳前後の、最も意氣旺盛にして、又最も感受性に富める青年子弟は、古人の所謂斐然として章を成せども、之を裁つ所以を知らざるものではあるまいか。故に若し彼等に裁つ所以を知らしめたならば、彼等は各自の力に依つて、如何に見事なものに仕立てることであらう。而も時代は移り、風俗は易る。故に又、時俗に適應する方法を會得せしめて置かなければならぬ。是に於てか不器的人材教育の必要が起つて來る。然らば則ち身を教職に置ける吾等は、果して常に正しき方法を教へてゐるのだらうか。而してその方法たる、飽くまでも能動自發的ならしむべく、斷じて受動嫌疑的ならしむべきでないことは勿論である。

高等學校本來の使命は、森子の言の如く、「社會上流に立つべき人物正確に學術精練の士を多く養成すること」でなければならぬ。而してこの重大なる使命は、過去五十年の實績に徴して、大體に於てその方向を誤ることなく遂行せられて來たものと謂ふべきであらう。本校の卒業生のみにも、附録に示す通り、醫學部・工學部・臨時教養員成所を除き、既に一萬に垂んとし、全國新古二十有餘校の卒業生は、恐らく十五萬に近かるべく、その中の大多數が、進んで大學の課程を了へて、社會の上流に立ち、學術の研鑽に努め、國家有爲の人物として、文運の振展に貢獻し來つたことは、餘りに明白である。

本校五十年の歴史には、新興の意氣と、守成の努力と、敗類の傾向と、爛熟の弊風と、挽回の動向とがあつた

不器的人
材教育の
必要

本來の使
命の遂行

時代の趨
勢と本校
の變遷

ことが察せられる。而もそれは、強ち本校に限つたことでもなく、又、教育者の精神氣魄の如何にのみ由るとは即断し難く、社會風潮の影響と大なる關係を有し、一張一弛反復しながら進んで行く。故に、緊張時代と云ひ、弛緩時代と云ふも、概括的の謂であつて、その奥底には、歴史と傳統とがその主流を爲し、假令緊張せる時代に在りても、墜落する者もあり、弛緩せる時代に於ても、氣魄縱横の士もある。日露戦時の龍南會雜誌を以て、その一例となすことが出来よう。又、一時惡風に感染せる者が、心機一轉、致々として自ら疆めた結果、社會に出ては目覺ましい活躍をしてゐる人があり、之と相反して、在學當時は、所謂修養家を以て自ら任じてゐる者で、その後餘り芳しからぬ人もあるであらう。

中學時代、品行方正學術優等の者が、入試の難關を突破し、青雲の望を懷きながら、大いなる期待を以て入學して見れば、或は誘惑に敗れ、或は幻滅を感じつゝ、精神的に肉體的に、學窓以外に何物かを求めて已まぬ者も、その中には出て来るであらう。かかる場合、之を適當に善導して、或程度の満足を與へることは、洵に容易ならぬことである。

學科課程なるものも、之を先進の經驗に徴し、之を現實の情勢に照し、更に之を將來の動向に察して定められたものであり、之を云々することは敢て當らぬとしても、青年子弟の生活そのものを等閑にし、甚しきに至りては、之を無視したりしては、教育の効果は擧るものではない。加之、青年時代は、總じて純理を好愛し、正義觀が熾烈であるので、不自然な作爲的の言行に對しては、直覺的に反抗したがる傾向を有することは、壯年期以上の人は、自ら省みて誰もが首肯する所であらう。今更孟子の言を引くまでもなく、天下の英才を得て之を教育す

青年心理
正義觀生徒善導
の困難と
教授内容
の反省

ることは、人生の至樂であるとは云ふものゝ、それは常に己を虚しくし得る人へのみ許さるべきことである。何となれば、教育は、理窟でなく、實際であるからうである。

世態人情が複雑するに連れて、國家の法規も漸次精微を極めて來たやうに、高等學校の學科も規則も次第に多端となつた。本校に於ても、校則は勿論のこと、龍南會規則も、昔日の比でなく、而してそれ等の改正若くは變遷の大要は略と記して置いた積りであるが、嚴密に申せば、現行の規則に就いて、逐條的にその由來を検討すべきである。さりながら、規則なるものは、要するに形式であつて、生活そのものではない。規則の中には、嚴格に適用されてゐるものもあれば、單に大綱を示し、旨趣を明かにするに過ぎないものもあることを、今更の如く了解した。故に今を以て古を推せば、過去に於ける規則も亦、實際の生活とは相當懸隔せるものであつたことが知られる。是に於てか、歴史と傳統とより成る校風の、如何に尊ぶべく重んずべきことか。龍南とか、龍南人とか、剛毀木訥とか云ふ語は、主に生徒間に用ひられてゐるだけ、生徒のみに限られるやうではあるが、職員も亦同じく龍南人であり、龍南の歴史と傳統とを形作るに與つて大いなる力があつたのは、共に在職僅に二年に過ぎなかつた西村・嘉納二校長や、秋月草軒翁などの例を擧げるまでもないことである。恰も日本精神なるものが、言説を超越して、専ら之を心得し體認せられるべきものであるやうに、龍南精神と云ひ、五高魂と云ふも、之を具體的に指示することは出来ないに拘らず、儼然として後進に臨み、循々として子弟を誘ふのみならず、職員に對しても亦同様に、隱然たる威力を示してゐるのである。故に、苟も龍南に生活する者は、默々不言の歴史と傳統とを無視しては、本校の教育的價值もその半を減するのであらう。

默々不言
の歴史と
威傳の威

改革は理論的且歴史的要するを歴

而してこの一大事實は、高等學校、否各種の學校に就いて言ひ得べきこと、考へる。故に、凡そ改革なり革新なりは、理論的であると共に、必ずや歴史的でなければならぬ。従つて、古き歴史を有すれば有するほど、机上一片の理論のみを以て臨むことは、不條理でもあり、至難でもある。尤も歴史や傳統は、必ずしも悉く現實的價值あるものと限らず、中には舊來の陋習を、無反省に、無批判に、傳達し、繼承して來たものもあるであらう。さりながら、高等學校は、設立以來五十年の久しきに亙り、國家社會に幾多の寄與を爲し、建設の意義と使命とを果しつゝ、あることを思へば、時勢の進運に伴つて、形式若くは内容の上に、改善が加へられ、益々其の刷新振興が圖られねばならぬ。

但この際一應考へて置かなければならないのは、高等中學校創設當時の國情は、富力に於ても、文明に於ても、歐米先進國の比でなく、従つて、文運を進め、國力を養ふためには、有爲の人材と學術の精緻とが、最も緊要缺くべからざるものであつて、その必要上自然に生れ出でたものであつた。然るに今日となつては、知識に於ても、富力に於ても、列強に對して大體遜色を見ないやうになり、教育機關も年と共に整備し、社會上流に立つべき有爲の人材は、必ずしも之を高等學校卒業者にのみ求めてゐないのであるが、高等學校の存在理由は、半平不拔のものがあると信ずる。

本校近來の生徒は、一體に溫順となり、教官に對して反抗的態度を示すやうな者は殆ど無くなつたのは、社會情勢や軍事教練などの影響もあらうが、兎も角も喜ぶべき現象である。さりながら、氣魄と感激とに於て、往年のそれに比してどんなものであらうか。眞理を好愛し探究するの熱心は多とすべであるが、餘りに個人主義的と

鹿を逐ふ者山を見

なり、懷疑主義的となつたやうだと、前輩からも屢々聞かされる。本校多年の矜りとして標榜し來つゝ剛毅木訥なるものも、今果して如何なる姿をしてゐるのだらうか。鹿を逐ふ者山を見ずで、關係外の人に向つて尋ねて見なければ、當事者では何とも言へないことである。

さはあれ吾人は、尊い歴史と、強い傳統とに育まれつゝ、その歴史をして愈々光輝あらしめ、その傳統をして益々生氣あらしめなければならぬ。高等學校を、吾が第五高等學校を、長へに存続せしめる爲には、職員も生徒も、自ら反み自ら彊めつゝ、相與に心を協せ力を戮せて、本來の使命を全うし、有終の美を濟さなければならぬ。この意味に於て、五十年の回顧は、同時に自己の反省ともなり、時代の認識ともなり、皇國への感謝ともならなければならぬ。若し吾等にして、至誠一貫各自の職分に精勵して息まないならば、本校の聲價を失墜することも斷じてなく、これやがて高等學校の使命を完うすることを得べき所以であると信ずる。

願へば昭和十一年正月以來、二年有餘の歲月は、洵に夢の如く過ぎた。その間公務の旁、一年有半を費して、各課所屬の志料は勿論、龍南會雜誌其の他の關係書に就いて、嚴密周到なる調査整理を爲し、昨秋五十年記念會の記録を了るや、茲に始めて本書の筆を援り、十二月九日未明、王政復古七十年記念の日を卜し、感激を覺えつゝ、本校設立前に於ける明治時代の教育を草創め、小心翼翼、微忱を致し非才を盡して禿筆を呵したが、己が微力を嘆じては、幾度か筆を抛たうしたのであつた。従つて、或は輕重を誤り、本末を顛倒したことも、少ないであらう。或は精粗を失し、長短を忽にしたことも、多かつたであらう。負託の任や重く、前途尙遙に於て、萬感交々迫り、冷汗背を潤しつゝ、筆を置く次第である。

二年有半の感懷

高等學校の使命

昭和戊寅三月十日學年末試驗終了日午後五時 銀杏城下白川河畔於 知足齋編者誌